
ハッピーエンドは信じない

北咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハッピーエンドは信じない

【著者名】

N7392E

【作者名】

北咲希

【あらすじ】

渡辺恭子、十七歳。どこにでもいる平凡でちょっとクールな女子高生。恋愛なんてつまらなく、ハッピーエンドなんてどこにもなくて、いつかあっけなく終わるものだって信じてた。そんな彼女の日常に突然訪れた変化とは。

疑心暗鬼のシンデレラ

シンデレラは王子様と共に、末永く幸せに暮らしましたとい。めでたし、めでた……

「くない！」

手に持っていたカラフルな絵本を放り投げ、大声で喚いたのは、五歳のわたしだった。

どうしたの、と訝しげにわたしを見る母に、投げ捨てたばかりの絵本を指差し、記憶の中のわたしは騒ぐ。

「末永く幸せ！？ そんなことあるわけないじゃない！ ハッピー・ハンドには続きがあるのよ」

そう叫んだときに見た、母の心底呆れ果てていただろう顔は忘れない。少し田を見開き、口元は苦笑を浮かべていた。それから、優しい声でこう告げたのだ。

「それは、この間のドラマの台詞ね。記憶力がいいのね。さあ、ご飯にしますよ」

母には、それはそれはあっさりと流されてしまつたが、果たしてドラマの影響を深く受けたのか否か、その思想はわたしの心に深く根付くこととなつたのだった。

「聞いてよ、恭子！ わたしついに晴樹君と付き合つことになつたの！ よつやくハッピーハンドだわ！」

「美智、落ち着いて聞いて。ハッピーハンドなんてこの世に存在しないわ。両想いで付き合つたって、あとは嫌いになつて別れるしかないでしょ？ そんなのハッピージャないわ」

紅潮させた頬に、きらきらと輝く瞳。それらをまっすぐに受け止めながら、真顔で冷たく切り返したのが今のわたし。

美智は一瞬、ひどく傷ついたような瞳でわたしを見たが、すぐにその丸い目を吊り上げた。

「また始まつた！ そのネガティブ思考を何とかしなさいよ、恭子！」

友達が一番幸せな時にテンショントガるようなことを言つた朝のホームルーム前の騒がしさの中でも、高めの美智の声はよく響く。周りの生徒がちらちらとこちらに視線を向けるのが分かつた。誰かこの口の目を覚ましてあげてよ。ハッピーハンドなんて幻想なんだから。

「恭子！ あんたつてやつはまた人の話を聞いてないでしょ！ 今口こそのネガティブを何とかしてやるわ」

セーラー服の袖をまくり上げながら、美智は相変わらず目を吊り上げてこちらを見ている。色白の丸っこい顔に柔らかそうな栗色の毛。せっかく可愛らしい容姿をしているのに、眉を吊り上げて怒つてなんかいたら台無しだわ。

「ちょっと、恭子！」

「分かった、分かった。オシアワセ二ネ」

「何よ、その棒読みは！ 恭子、私はあんたの為を思つて」

投げやりな言葉に子犬みたいに噛みついてくる。かわいいなあ、と思いながら机に伏せていた文庫本を手にとった。ゆっくりと表紙を開き、ぱらぱらとページをめくる。どうまで読んだんだったかな……。

「……恭子さん？ 人が大事な話をしている時に何で本を読みだすかな？ しかも……何それ。『血塗れの迷宮』？ またサスペンスなの」

真っ黒の背景に点々と散る赤い花。そこに深紅で、いわゆる血が流れた跡のような文字で書かれたタイトルを、美智は顔をしかめてたどつたようだつた。わたしは適当に頷きながらページをめくる。ちょうど今殺人事件が起きたところなのだ。

「あのねえ、なんで花の女子高生がそんなものを、こんな真夏の天気よい気持ちいい一朝から読んでるわけ？ 具合悪くならないの？」

「ならないわよ、心外ね。だいたい気持ち悪いのはベタベタとしたハッピーエンドの恋愛小説よ。物語は完結かもしれないけど、続いているのよ？ 永遠の愛へとかさむいだけじゃない。いつかは気持ちなんて冷めるんだから」

しゃべりながらもページを次々にめくる。美智とのこんなやり取りはこのところずっとだ。高校一年生の夏休み過ぎ、何となく気持ちが盛り上がってるのかな、とは思う。その上、わたしが一切恋愛とかいうものから遠ざかっているのが気に入らないらしい。恋バナってやつがしたいのかな、とも思つけれども……あいにくわたしはそんなものに興味はない。

美智には悪いけど……つて……あら、主人公が殺された。予想外だわ、こんな展開。

「恭子おー、何でそんなひねくれた子になっちゃったのよお。黙つてればフツーに可愛いし、性格が悪いってわけでもないのにさ、何でハッピーエンドだけをそんなに敵視してるの？」

「敵視っていうか……」

物語が面白い展開を迎えてきたし、またいつものようなやり取りを繰り返すのが面倒になってしまった。どうやって話を終わらせようかな そう考えていたときだった。

「着席ー」

左手に生徒名簿を抱えた担任が教室に入ってきた。今日の担任の服装は真っ黒なジャージの上下で、首から黄色いホイッスルを下げた姿はいかにも体育教師という風貌だ。短い黒の短髪の下で、少年のような目をきらきらとさせて教壇に立つ。一昨年教師になつたばかりという我等が担任は、まるで美智のように純粋な瞳を持つた人だった。

「ちえ。むらやん来ちゃつたじゃん。恭子、今の話あとでまたするからね！」

村田先生をむらやん、と呼ぶ美智は私にびしつと人差し指を突き

つけたあと、自分の席へと戻つて行つた。人のことを指差しちゃだめって言い損ねちゃつたじやない。そう頭の片隅で思いながらも、わたしの脳の大部分は先の読めない小説の展開に追いつくのに尽力していた。

だから そう、だから、突然沸き立つた教室の雰囲気にひどく驚いたのだ。

周りの女子たちが黄色い声を上げ、突如ざわめきたつた教室。手元の本から視線を上げて辺りを見渡せば、きらりと光る金色が田に飛び込んできた。

「静かに、静かに！ もう……」うなるとは思つてたけどな、俺も。転校生だぞ、お前ら。仲好くしろよー」

はつらつとした声で話す担任の横に、黒板を背にしてまっすぐに立つ人影。学生服の黒いズボンに、田に痛いほど真っ白のワイヤーシャツ。本から上げた視線をそのまま上にたどつていけば、金色の下で輝く、透き通つた碧に出会つた。

「クリストファーー王子！――！」

その瞬間に叫んでしまつたのは、ほとんど無意識だつたのだ。

疑心暗鬼のシンヒューラ（後書き）

見切り発車いたします。先の分からない作品ですが、お付き合い頂けたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7392e/>

ハッピーエンドは信じない

2010年10月21日22時49分発行